

タイトル	エンゲル，プロイセン統計局へ
著者	太田，和宏；OHTA, Kazuhiro
引用	季刊北海学園大学経済論集，62(1)：1-11
発行日	2014-06-30

《論説》

エンゲル，プロイセン統計局へ

太 田 和 宏

憤然として職を辞してはみたものの、ザクセン統計局での経験が挫折で終わったことには変わりなかった。新たな方向を模索して「ザクセン抵当保険会社」の社長についてはみたが、働き始めてそれほど間もない1860年初頭、エンゲルはさいわいにもプロイセン王国内務省から統計局長就任の要請を受け、4月1日付けで着任した。本来の仕事をやより高い次元で遂行できる喜びとともに、ザクセンを見返す気持ちも味わったことであろう。

まずは、エンゲル招聘にいたるまでのあらましから始めよう。

統計局の業務を統括し、統計局長の任免権を持っているのは内務大臣である。エンゲル招聘を仕切った内相は、伯爵の爵位をもつマクシミリアン・フォン・シュヴェリーエン（Maximilian Heinrich Karl Graf von Schwerin-Putzar 1804-72 以下本稿ではシュヴェリーエンと略称）であった¹⁾。彼はドイツ北方メクレンブルク-シュヴェリーエン公国に多くの所領をもつ名門貴族の家に生まれた。ベルリンとハイデルベルクで法学を修めたのち、試補見習（Referendar）として高級官僚のキャリアを開始するが、彼の精神形成に決定的な影響を及ぼしたのは、若き日にベルリンで出入りを許されたシュライアマハー家のサロン（Schleiermacher'sches Haus）における交際だったという。シュライアマハー家の当主フリードリヒ（Friedrich Daniel Ernst Schleiermacher 1768-1834）はベルリン大学の教授職にあつて、自由主義神学の祖とも、解釈学の祖とも呼ばれる高名な観念論哲学者・神学者であった。そこでシュヴェリーエンはリベラルで観念論的な精神傾向を身につけたようだが、同時にシュライアマハーの寵愛も得た模様で、その娘と結婚している。

政治家としてのシュヴェリーエンのキャリアは、1848年3月革命の結果成立した「三月内閣」の文部大臣（Kultusminister）に任命されたことから始まる。革命の渦中ではフランクフルト国民議会議員に選ばれ、王党派に所属するが、革命挫折ののちはプロイセン下院議員となり、良識ある穏健自由主義者とみなされ、信望を集めた²⁾。

反動化のなかでいったんは退潮したブルジョワ自由主義だったが、50年代の工業化の躍進にともなう、再び息を吹き返した。58年下院選挙では自由派が圧勝し、ここに「新時代」（“die Neue Aera”）が到来した。それは現実政治の冷徹さから遊離して自由派が舞い上がるような時代だった。58年10月に成立した穏健自由派首班の内閣が59年7月に改造される時、シュヴェリーエンは内務大臣に任命されたのであった。そして就任後まもなく、統計局長選任の案件に取り組むことになる。

エンゲルの活動の背景を理解するためには、ついでながらその後の内相についても触れておいた方がよいだろう。「新時代」に激化していた軍制改革をめぐる立憲派對統帥権独立派の対立は、

ついに 62 年 3 月に始まる「憲法紛争」で頂点に達した³⁾。保守派の巻き返しは猛烈で、同年 3 月 19 日「新時代」内閣は崩壊し、シュヴェリーンは罷免された。そのあとを襲ったのは郡長、警察長官、下院議員を歴任した保守派のヤーゴ (Gustav Wilhelm von Jagow 1813-79) であった⁴⁾。彼は、選挙干渉を試みて自由派から不信任を表明されるほどの人物であったが、9 月に登場したビスマルク (Otto von Bismarck-Schönhausen 1815-98) のあまりに強引なやり方 (予算審議も経ずに軍制改革・軍備拡張を推進するという) についていけず、同年 12 月に更迭された。在任期間は 9 か月と短く、しかもその間政争は熾烈を極めていたから、統計局に関して明確な指揮をおこなえる状況にはなかったと思われるが、統計セミナール設置のための「布告」を発することにはかかわった。

ヤーゴの次に内務大臣になったのは、オイレンブルク (Friedrich Albrecht Graf zu Eulenburg 1815-81) であった。彼は 1862 年から 78 年まで約 16 年の長きにわたって内相を務めていたから、60 年から 82 年までのエンゲルの局長在任期間の大半を監督していたことになる。この内相とエンゲルとの関係はどうだったのか。

オイレンブルクはプロイセン東部ケーニヒスベルク近くの名門貴族の家に生まれた⁵⁾。一族は政治家や役人を輩出し、東プロイセン州には「オイレンブルク家の人々のように賢く」という警句が残されているほどだという。オイレンブルクも例にたがわぬ天分に恵まれ、ギムナジウムでは最優等生であった。ケーニヒスベルクとベルリンで法学、国家学を修めたのち、財務省、内務省の高官をへて、抜擢されて外務省に転じた。公使を歴任したあと、1859 年から 62 年まで日本、清、シャムと友好通商条約を締結するための特使としてアジアに派遣された。

帰国後半年ほどして内相に任命されたオイレンブルクが、はじめにしたことはビスマルクを全力で支援することであった。官吏の反政府的言動を禁止し、1000 人を超える違反者に罷免ないし左遷の処分をくだしたという⁶⁾。だから「憲法紛争」が収まる 66 年ころまでは「ビスマルクの有能な協力者」だったといってよい。だが、普墺戦争の結果拡大した領地の地方行政を発端として、オイレンブルクは次第にリベラル色を強め、ビスマルクと意見が合わなくなっていく。それは、オイレンブルクが対外的には強い国家、対内的には安定した統治をめざす「国家理性」の観点から、古い郡体制に付着した封建秩序の残滓を除去し、地方自治の近代化を図ろうとしたのに対して、ビスマルクは古い郡体制の上にそびえる保守派の領袖だったからである。この意見の相違は基本的な政治志向にもとづくものであったから、たんに地方自治にとどまらず、ときとして統計局にも及んだ。

のちに見るように、エンゲルは局長就任の条件として、内務省からの局の自律と自由を求め、シュヴェリーンの了解を取り付けていた。また、ザクセン時代の例にならって、就任早々『プロイセン王国統計局雑誌』を創刊し、そこでザクセン時代と同様の学術活動を展開していた。ときに政府方針に反する解説論文を公表するエンゲルとその雑誌に対して、ビスマルクはしだいにいらだちを強めていった。グラマー-ソレムが指摘するように⁷⁾、60 年代半ばからビスマルクはオイレンブルクに対して、こうした活動をやめさせるよう、さもなくば雑誌を廃刊するかエンゲルを解任するよう、繰り返し働きかけた。だが、オイレンブルクはそれを適当にあしらうか、無視するかして、ビスマルクの意図を代理執行することはなかった。ザクセン時代と違ってエンゲルが長く職務を続けることができたのは、「国際的な名声、局への不屈で疲れを知らぬ貢献、雑誌の幅広い人気、そして決定的に重要なのは、内相オイレンブルクの庇護」⁸⁾のおかげであった。そういうことが可能であったのは、オイレンブルクが国王と親密な間柄で、行動の自由が大きい

かったこともさることながら、就任時の契約は担当者が代わっても維持されなければならないというオイレンブルクの良識の賜物であった。この契約を破棄するには、担当者をイエスマンに代えるほかなかった。さすがのビスマルクもただちにそうした決断を下すわけにはいかず、オイレンブルクが地方自治改革をめぐるビスマルクとの対立および議会紛糾の結果、内相を辞職する78年まで待たなければならなかった。そこまでいけば、エンゲルの辞職(82年)まではあとわずかだった。

次にエンゲル着任までのプロイセン統計局の歩みを簡単にみておこう⁹⁾。

プロイセン統計局は、ドイツ諸邦の統計局のなかで、バイエルンの1801年に次いで2番目に古く、1805年に設立されている。局長は国務大臣のシュタイン(Karl Reichsfreiherr vom und zum Stein 1757-1831)であった。だが、態勢が整う前にフランス軍のプロイセン侵攻が起これ、活動中断を余儀なくされた。

1810年の再建を主導し、局長に就いたのは統計学者ホフマン(Johann Gottfried Hoffmann 1765-1847)であった。ブレスラウのさほど豊かではない家庭に生まれたホフマンは、奨学金を得て学ぶ苦学生として、ライプツィヒ大学などで、法学、数学、自然科学、地誌を学んだ。おそらくはその市民的な出自ゆえに、自由思想的な立場(freisinnig)に立つのは自然な成り行きであったろう。卒業後は家庭教師、工場主任などを転々とするうちに、統計学で頭角を現し、1807年ケーニヒスベルク大学に迎えらる。1810年には創設されたベルリン大学に国家学教授として迎えられ、自ら主導して再建した統計局の局長に就任した。ベルリン大学教授と統計局長の兼任という慣行はこの時始まり、以後エンゲルの局長就任時まで継続する。ホフマンは、統計局の活動を活性化させ、「国土記述という形で社会経済と国民生活の全体的数量像を描写しようとする試みを提示」¹⁰⁾することによって、国家統治に役立つ学問としての国情論から、社会統計へと架橋する役割を果たしたとして、高く評価されている。だが、いかんせん、統計局の常勤スタッフはわずか数名で、予算も権限も小さく、できることは限られていた。その業務はもっぱら、各行政当局が作成する「報告資料の収集・編纂に限られており、自ら調査を企画・実行する必要」はほとんどなかった¹¹⁾。

ホフマンが1844年に引退するのにもとない、次の局長になったのはディーテリツィ(Karl Friedrich Wilhelm Dieterici 1790-1859)であった。ディーテリツィは、ベルリンで印刷業を営む市民的家族のもとに生まれた。ケーニヒスベルク大学で、統計・国家学、哲学、数学を学び、そののち、創設されたばかりのベルリン大学に入って、法学(ザヴィニー)、国家経済学(ホフマン)、歴史(リュース)、農学(テーア)を修めた。とりわけ数学を得意とし、王家の王子や国務大臣の息子の家庭教師になるほどだったという。卒業とともに公務を開始するが、まもなくナポレオンに対する解放戦争に従軍し、有能な将校として各地を転戦した。戦後は公務に復帰し、試補試験に合格して役人として順調に出世していった。公務の傍ら彼は、論文を書くとともに、ホフマンのもとでふたたび統計学を研究した。このとき彼はホフマンの目にとまり、後継者として教育されるようになった。ホフマンはすでに教授と局長の兼任に困難を感じていたらしく、34年には教授職をディーテリツィに譲るとともに、局長への準備を含みとして局の補助者に任命した。そして44年、ホフマンの辞任によって、ディーテリツィは統計局長に就任した。統計局長としてのディーテリツィの功績は、局の活動領域を経済分野へと広げたことと¹²⁾、『統計局報告集』(“Mittheilungen des statistischen Bureaus”)の創刊などで認められてはいるものの、業務

のやり方はホフマンを踏襲するだけだったとしてネガティブに評価されている¹³⁾。また、ディーテリツィはどちらかというと教授職に情熱を注いでいたらしく、教授職務を理由として国際統計会議を欠席するなど、両職の兼任の弊害も出ていたようで、局の活動は停滞の方向へ向かっていた。エンゲルが着任する前の50年代の統計局の様子を、その愛弟子のクナップ (Georg Friedrich Knapp 1842-1926) が、のちに回想記のなかで触れているので紹介しよう¹⁴⁾。クナップが直接経験したわけではないことも含まれているが、エンゲルにとってはもっとも心を許せる弟子の一人であったから、ことあるごとに聞かされていたのだろう。

「(1863年夏ベルリンで開かれた国際統計会議で、私がエンゲルと初めて出会った) 当時、彼はそのような地位にある者としては際立って若く、まだ42歳にすぎなかった。しかも、すでにプロイセン王立統計局の局長を2年務めていた。局は、ウンター・デン・リンデン通りの、最高裁判所からそう遠くないところにある、古風で背の低い建物のなかにあった。以前はそれは、(内務)省のために、地誌に関する雑多な資料を収集する役所だった。一番よく言っても、せいぜい資料豊富な図書館にすぎず、独自の創造的な活動はほとんど皆無だった。というのも、局は各行政機関からすでに加工された状態の資料を受け取り、原資料についてなすべきことは何もなかったからだ。どのような統計調査をどのようにおこなうのかということについては、ほんのわずかしが話題にのぼることはなかった。人口調査だってこれまで自力でおこなったことは一度もなかった。その伝統は一言でいえば次のようだった。取り組みは役人風、効果はわずか、影響力は皆無、と。いまやすべてが変わらなければならなかった。」

1859年7月、ディーテリツィが現役のまま死去すると、後任探しの問題が浮上するが、任用するのは統計局長については内相シュヴェリー、ベルリン大学教授については、同じく「新時代」内閣の文部大臣を務めていたアウグスト・フォン・ベートマン-ホルヴェーク (August von Bethmann-Hollweg 1795-1877 第一次世界大戦時の帝国首相の祖父) であった。工業化、近代化の進行にともなって、両職務とりわけ統計局長において、求められるものが一層複雑化し、増大していることは、すでに気付かれはじめていた。二人の大臣はともに、両職務の兼任をこのまま続けてよいものか、迷わざるをえなかった。そこで二人は、この問題についての所見を専門家に求めることにした。選ばれたのは、ゲッティンゲン大学教授ゲオルク・ハンセン (Georg Hansen 1809-1894) であった¹⁵⁾。

ハンセンは農民を祖父とし、父がハンブルクで小さな手形商を営む家に生まれたが、父の事業が失敗したために苦学生となって、ハイデルベルク大学で経済学、農学を学び、キール大学で統計学を学んだ。31年(22歳)には、実際の調査体験をもとにして、『シュレスヴィヒとホルシュタインにおける世襲隷民制の廃止』(Aufhebung der Leibeigenschaft in Schleswig und Holstein) という論文で博士の学位を授与された¹⁶⁾。37年にはキール大学の正教授に抜擢され、42年から48年まではライプツィヒ大学教授(このときヴァインリヒと出会っている)、だがザクセンにはなじめなかったようで48年から60年までゲッティンゲン大学教授を務めていた。この間、ドイツ北西部の村落制度、耕地制度について実証的な研究をすすめて、すでに農業史の大家としての地位を不動のものとしたばかりか、官庁統計についても論文をいくつか書いていた¹⁷⁾。所見を求められたときにはすでに50歳に達していた。

ハンセンに諮問されたのは次の3点だった¹⁸⁾。①プロイセン官僚組織のなかで統計局はどのような地位にあるべきか。②ベルリン大学教授と統計局長の兼任はこのまま続けるべきか。③次期局長にはだれがふさわしいか。

ハンセンの所見は以下のようだった。

まず①について。統計局が内務省の内局として存在するという現行の位置は、「実用的な理由から」¹⁹⁾ 廃止されてはならない。ザクセンなどの範例もその利点を示している。その利点とは、省と局の相互の情報交換がよりスムーズになされること、その結果、局の活動に対する省官僚の関心も著しく高まることである。こう指摘したうえで、ハンセンは機構上の具体的な改善策を二つ提案した。ひとつは、各省がばらばらにおこなっている統計調査と統計局の活動をより緊密な関係にするために、各省の間の調整機関として「中央委員会」が設置されるべきこと。関係大臣によって構成され、内相が議長となるこの委員会は、局長の意思が各方面に浸透するように手助けする機関であるべきこと。もう一つは、地方政府がばらばらにおこなっている統計調査を統一するために、局長はできるだけ地方の実務担当者を訪ねて指導し、実務担当者は国家学の教育を受けた法学士でなければならないことを内相に理解させること。彼らを1、2年ベルリンに呼んで教育することも有益であろう。

ここでは、エンゲルが局長就任後に始める二つの新機軸が、二つともすでに構想されていたことが特に注目される。

②について。ハンセンは、兼任にもいくらかの利点があることを認めたとうえで、ふたつの仕事の使命が大きく異なることを指摘する。統計局長の仕事は、使い勝手のよい統計を用意できるように熟慮し、そのために実務組織を指導するだけでなく、さらに重要なのは、積み上げられた数字の山から「より確かな解答を速やかに適切に見つけ出し」²⁰⁾ 得られた資料を見通しのきくように公表することである。それに対して教授は、数字の結果で若者を丸めこむようなことをしてはならず、彼らを「独自の、自立した研究へと励まし、導く」²¹⁾ ことに努めなければならない。その両立が難しいことは経験が示すところである。ホフマンもディーテリツィも十分な成果を挙げられなかった。その結果、近年では両職務ともその水準が下がっている。それゆえ二つの職務は分離すべきである。国民経済がますます膨張し、行政が必要とする情報量が増大した結果、統計への需要も常に増大している。また国家学、経済学の各分野もこれまで局が提供してきたものよりも、もっと包括的で詳細な調査結果を求めているのである。

兼任の廃止を勧告する論拠は、それ自体としてはまことにもっともであり、人を納得させるに十分といえよう。そうではあるが疑問も残る。それを誘発するのは、エンゲルが大学教授資格(Habilitation)を取得していなかったという事実である。この時代になると教授資格を持たずに大学の教壇に立つことが、たやすいことだったとは到底考えられない。ましてやベルリン大学である。資格取得には博士学位取得よりも高いハードルがあって、提出論文が合格し、同僚たちの前で資格取得講演をおこない、さらにラテン語による公開講演をおこなわなければならなかったのは、ブレンターノ自叙伝が示している²²⁾。エンゲルのキャリアとザクセン統計局での活動から考えて、教授資格を取ることは難しいことであつたし、またザクセン時代にはその必要もなかった。ところが、③でみるように、ハンセンは統計局長にはエンゲルが最もふさわしいと信じ、心からその就任を願っていたのであるから、従来通り併任を続けようとするれば、その構想には重大な障害が生じざるをえないことになる。つまり、エンゲルを局長に推そうとすれば兼任廃止を勧告せざるを得ず、兼任維持の前提に立つとエンゲルは候補から外れることになるというわけだ。

ということは、ハンセンがここで挙げた論拠と結論は、エンゲルを統計局長に就任させるための方便であった可能性もなくはないのだ。ただし、エンゲルではなく、両方の資格を満たす候補者がいたとしても、二つの職を分離するのは時代の要請だったとみることもできる。おそらくは、実際上の方便と時代の要請の両者の考慮が働いたというのが真相だったろうと思われるのであるが、むろん答申に前者を書くわけにはいかなかったのである。

③について。ハンセンは情熱をこめてエンゲルを推薦した。たしかにザクセン政府は彼を失脚させたが、ザクセン統計局を作りあげた彼の手腕には目を見張るものがあるとして、推薦理由を説明した。ザクセン時代のエンゲルの仕事ぶりはあまりにもざっくばらんで、役人らしからぬものであり、また公的な義務と私的な関心をきちんと分離させていたと言い難い面もあったが、しかしその卓越した組織能力、並はずれて素早い判断力、秀でた大局観、類まれな生産性、際立った労働能力、すぐれた経済学的素養、には疑問の余地がない。それらによって、数年のうちにザクセン統計局の名声をヨーロッパ中に轟かせた、偉大で重要な人物である。彼は、調査を細分化することによって、これまで他の局が注目してこなかった統計の多くの価値を、現実に役立つものにした。彼はまた、数字から予期せぬ結果を引き出し、説明と表を通じてその結果に世間を注目させるすべを知っている。さらに、プロイセンではなされていないが、ザクセン統計局における雑誌の編集も見逃すことのできない彼の業績である。そしてハンセンは、推薦の形式を満たすために他の二人の名前も挙げておくが、エンゲルほどこのポストにふさわしい者はいないと、これ以上はないと思わせるほどの自信を持ってエンゲルを推薦した。

以上のようなハンセンの答申は、シェールがいうように、「プロイセン統計局のこれからの活動を活性化させるための包括的なカタログ」²³⁾であった。二人の大臣に異論のあるはずもなかった。こうしてエンゲルは統計局長へのオファーを受けることになるのだが、ベルリン大学教授職はどうなるのか。諮問にはなかったものだから、ハンセンは答申しなかったにちがいない。ベルリン大学はすでに最高学府とみなされており、ディーテリツィの後任はそこで国家学のなかの統計学を講義しなければならなかった。後任がたやすく見つかると思えない。学問的実績からいっても、また両職を分離するという答申を提出した成り行きからいっても、ハンセンが最適任であることは明白だった。ハンセンも行きがかり上、断ることはできなかったろう。こうしてハンセンはエンゲルの局長就任とほぼ時を同じくしてベルリン大学教授に就任した。だが喜び勇んでというわけではなかった。この時の心境をハンセンが後に回想したものがある。1909年ウィーンで開かれた社会政策学会で、ハンセン生誕100年を記念してクナップが紹介している²⁴⁾。

「私は俸給がよくなることを求めて、ベルリン大学からの招聘に応じたわけではなかった。同様に、ドイツでもっとも偉大な大学の教授になるという功名心に突き動かされたわけでもなかった。そうではなくて、私はベルリンで何ものかを学びたいと望んだのだ。ドイツのもっとも大きな邦で、国家機構、国家行政組織、および個々の行政機関が政治家や官僚との交渉のなかでどのように機能しているのか知りたかったのである。この目的のために私は、ゲッティンゲンでの生活の楽しさと快適さを犠牲にすることにした。」

だからベルリン大学の教授となり、そこで講義することに意義を見出してやってきたのではなかった。そして実際に、ベルリン大学での講義はハンセンにとって決して愉快なものではなかった。すでに高名で尊敬のまなざしを向けられたはずであってもそうなのである。

「大学は私にとってかなり居心地の悪いままであった。…(たしかに知り合いの学者はいたし、財政学の講義では80人もの)その後の二つの講義では二度とお目にかかることのなかった数の学生が聴きに来てくれるということもあった。…だが、私はゲッティンゲンの時と同じような喜びと自信に満ちて講義することはなかった。というのも、同じやり方で学生の興味を引き付けることはできないと感じていたからである。ゲッティンゲンの学生たちは、実利的で平凡な講義や地味な話でも満足していたが、ベルリンの学生たちは、もっと高い獲得物を求めていた。私は、虎視眈々と獲物を狙うドイツの知識階級の狩りの足場に紛れ込んだ田舎者のような気持になっていた。心気症がこの感じ方を悪化させたかもしれない。」²⁵⁾

先にみたように、ハンセンは必ずしも恵まれた家庭の出ではなかったし、学問的にエリート・コースを歩んだわけでもなかったから、こういう気分になるのも無理ななかったろう。

63年春、学生としてハンセンの講義を受講したクナップも、その講義の人気の乏しさに触れている。ハンセンの講義は、入念に準備された講義ノートにもとづいて多くの事実を提供し、その判断は慎重で懐疑的であったから、「良心的ではあったが冷やかなもの」でもあり、「そこに楽しさとか熱意のようなものは感じられなかった。」講義室に現れたときの印象は、「不機嫌な教授の姿そのもの」であった、と²⁶⁾。

では彼がベルリンで本当に知りたかったことについてはどうだったか。

彼は、赴任からちょうど1年たった61年春、ベルリンで超エリートたちが集まる「月曜クラブ」(Montagsklub)に運よく入会を許された。これは政府要人、高級官僚、将軍、財界人、学者などわずか30人で構成される閉鎖的クラブで、新入会員は欠員が生じたときのみ、全員一致の同意のもとで入会できることになっていた。そこに入会を許されたということは、ベルリンにおけるハンセンの評価の高さを物語っているし、ハンセンも赴任目的に近づく手段を得たといえるだろう。だがここでもハンセンは疎外感を味わったようだ。なるほどこの機会は貴重なものだったし、ハンセンは要人たちへの質問を準備するために丸1週間を費やすほどの意義をそこに見出していた。また要人たちも立法や行政の誤りについてまで、腹藏なく率直に会話する習わしではあった。だが彼らが「私の質問にどれほど進んで応じてくれて、私に教えてくれる気があるのかどうかについては、私は十分にありがたいと思うことはできなかった。」²⁷⁾それどころか、彼らの間では、「革ジャンパーを着た人々の間でよりも、私ができることははるかに少なかった。」²⁸⁾

このように、ベルリンはハンセンにとって、決して居心地のよい場所ではなかったが、それでも彼はそこに9年間とどまった。そして69年、ゲッティンゲン大学の教授ポストに空きができたとき、再びそこに呼び戻された。60歳を迎えていたハンセンは喜んで元の職場に戻り、そこで静かな余生を過ごしたとクナップは伝えている²⁹⁾。

このようなハンセンではあったが、ベルリンで心から打ち込める場所がなかったわけではない。1862年、エンゲルが統計局の内部に開設した統計ゼミナールがその場所であった。これは、のちに触れるように、統計実務に携わる役人と若い研究者に、統計の理論と実務について専門的な教育をおこなうために設置されたもので、ハンセンはそこで講師として協力することになった。すでにみたように、もとをただせばハンセンのアイデアから発していたのだから、やりがいもあっただろう。そこでの仕事ぶりについて彼はこう書いている³⁰⁾。

「参加者にあわせて、私は講壇でする講義を完全に捨て去った。それに代えて会話と討論の指導に徹することにした。そこではものごとがまさに活気に満ちて進んでいき、私自身にとって有益だった。若い役人たちは、実践ですでに得た経験を伝え、若い研究者たちは、理論的な研究から作りあげられた考え方について報告した。」

さらに、65/66年冬にゼミナールに参加したクナップも、このゼミナールにおけるハンセンの生き返ったような姿について証言している³¹⁾。

「もちろんそこでハンセンの学識に再び接することができた。だが彼は人が変わったかのようだった。博士や試補 (Assessoren) や未来の講師たちに交じって、テーブルを挟んで——講壇はなかった——彼は冗舌で親しみやすく、じつに居心地がよさそうにみえた。熱のこもった論議は時の政治問題のあらゆる論争点にまで及び、しばしば歯に衣着せぬ率直さで語られた。だから明らかに学生大衆は彼には向いていなかったのであり、彼はもっと成熟した聞き手に囲まれることを望んでいたのである。私たちは心のなかで彼に謝罪した。なんとという豊かで生き生きとした性格！ なんとという自立した精神、なんとという精密な観察者！ そこには、単なる勤勉や努力の産物ではない根源的な才能、全く独自の人格があることは、今やだれの目にも明らかだった。あらゆる知の王国における干からびた学者の痕跡はなかった。」

ちょっと褒めすぎの気配がなくもない。クナップにとってハンセンは学問的に強い影響を受けた敬愛する恩師だったのだから、ここはいくらか割り引いて考えよう。しかしながら、同じ授業に出席しても、人によってまったく異なる印象を持つということは、私たち自身しばしば経験してきたところでもある。公平のために、クナップの1年後に統計ゼミナールに参加したブレンターノの印象記を紹介しよう³²⁾。

「農業史の大家ゲオルク・ハンセンが私たちにやってくれることになっていた講座もこれ(エンゲルの授業)よりましなものではなかった。というのは、彼が説明するには、自分で私たちに講義するのが退屈だから、代わりに各人がそれぞれ講義をすることにするというものだった。そこで各人が自分で研究して得たところを講義しても、慣行とは隔たっていて、彼は納得しなかった。これは、ハンセン自身が大学で教えた講義を、我々各人がその通り講義することで収まった。」

最後の文章ではブレンターノかハンセンのどちらかに疑問符を付けざるをえないが、それ以外からはむしろハンセンの教育者としての資質が浮かび上がってくる。なにしろドイツで初めての社会科学ゼミナールなのである。教育の決まったスタイルも慣行もなくすべてが未開拓の領域なのであった。

それにしてもハンセンのゼミナール授業について、二人の評価の隔たりは大きい。それには、クナップが大学での生気のない講義を聞いた2年後にゼミで見違えるハンセンに出会ったのに対して、ブレンターノは初めからゼミナールでハンセンにまみえたという事情も幾分与っているかもしれないが、より本質的には、二人の気質の違いによるところが大きかったと思われる。ク

ナップは、温厚、控え目で、優しさあふれるタイプなのに対し、ブレンターノはその才能のゆえに、才気煥発で辛辣なタイプであったと考えられるのである。そしてこの気質の違いがエンゲルの講義に対する評価においても、同様に観察できることは、のちに示すとおりである。

エンゲルを論じる場にしては、ハンセンについての叙述がいささか長くなりすぎたようだが、それには理由がある。その一つは、ハンセンが統計局長と教授の分離を提案して、エンゲルを局長に推薦し、自らは教授におさまったという事実については、これまでの研究によってしばしば指摘されているところであるが、肝心のハンセンの動機に言及しているものは皆無だからである。もう一つは、いわずもがな、エンゲルが再び統計の世界に復帰できたのは、ひとえにハンセンのおかげだったということである。だがそれだけではない。ドイツの社会改革という、本稿の背景にあるより幅の広いパースペクティブからみたと、ハンセンにはさらにもう一つの意味づけが与えられるのである。それは、19世紀末から20世紀初頭にかけて大きな流れとなったドイツ社会政策学の源流の一つがここにあったということである。クナップの温かい文章がそれを示している³³⁾。

「ハンセンが生まれ育ったのは、ドイツの地にまだいかなる社会政策も存在しなかった時代である。彼の青年期には、社会諸階級の激しい対立はまだまどろんでいた。彼は手始めにただ経済史の論文を書いたにすぎない。だがそうすることで、彼は若い世代のために道を掃き清めたのである。19世紀後半の出である彼の弟子たちは、騎士領の歴史の社会政策的側面を書き加えなければならなかった³⁴⁾。師匠はそうするように求めなかったし、手ほどきもしなかった。けれども、もしも彼がいなかったならば、すなわち、彼の根本的で思索に富んだ著作がなかったならば、それが企てられることは決してなかったろう。それゆえ我々はつねに感謝と畏敬に満ちてわが師の名前を呼ぶのである。なぜならば、彼は研究者として偉大であったし、結局は研究のみによって、学問を生活の規範として生きたからである。」

注

- 1) 以下シュヴェリーンについてはおもに、*Allgemeine Deutsche Biographie* より。
- 2) ただし、望田幸男氏によれば、シュヴェリーンは反動派からは、「祖国の裏切者」、「貪欲な共産主義者」呼ばわりをされたという。望田幸男『近代ドイツの政治構造——プロイセン憲法紛争史研究』ミネルヴァ書房、1972年、79ページ。
- 3) 「憲法紛争」の経過については、望田前掲書第二章が詳しい。
- 4) *Allgemeine Deutsche Biographie*
- 5) *Allgemeine Deutsche Biographie*
- 6) 望田前掲書、142、171-172ページ。
- 7) Erik Grammer-Solem, *The Rise of Historical Economics and Social Reform in Germany 1864-1894*, New York, 2003, p. 64.
- 8) *Ibid.*, p. 65.
- 9) この点に関しては、長屋政勝『ドイツ社会統計形成史研究——19世紀ドイツ営業統計の展開を中心に——』京都大学大学院人間・環境学研究科社会統計学研究室発行、2006年、第1章が詳しい。また、足利末男『社会統計学史』三一書房、1966年、82-89ページも参照。
- 10) 長屋前掲書、30ページ。

- 11) 同上書, 29 ページ。
- 12) 足利前掲書, 88 ページ。
- 13) この点に関しては, ドイツ諸邦の関税同盟営業表の統一に向けての努力に対するディーテリツィの旧守的姿勢を紹介する長屋氏の叙述が興味深い。長屋前掲書, 116-119 ページ。また, 129 ページの注 9) も参照。
- 14) G. F. Knapp, *Einführung in einige Hauptgebiete der Nationalökonomie*, München und Leipzig, 1925, S. 322. 初出は, Ders., Ernst Engel, †8. Dec. 1896. Erinnerungen eines Schülers aus dem Jahre 1865/66. in: *Allgemeine Zeitung* 19.12.1896 (Beilage)
- 15) 以下ハンセンについては, *Allgemeine Deutsche Biographie*, G. F. Knapp, Georg Hanssen. Erinnerungen aus den Jahren 1863-1893. および, Ders., Hanssens Lebenserinnerungen. 後二者はいずれも, Knapp, *a. O.* 所収。

クナップは, 父がミュンヘン大学教授, 母が化学者リービヒ (Justus von Liebig 1803-1873) の姉妹という教養市民の家庭に生まれた。大学は, ミュンヘン, ベルリン, ゲッティンゲンとわたり, 物理学, 化学, 国民経済学を学んだ。ベルリンではハンセンの講義を聴き, ゲッティンゲンではヘルフェリッヒ (Johann von Helferich 1817-1892) の指導を受けて, 65 年に博士の学位を取得した。学位論文の題名は「孤立国家における賃金と利子率に関するチューネンの研究の検証について」(“Zur Prüfung der Untersuchungen Thünens über Lohn und Zinsfuß im isorierten Staate”) というものであった。65 年秋には再びベルリンに戻り, エンゲルの統計ゼミナールに参加したのは本文のとおりである。統計ゼミナールではエンゲルに深く傾倒するのは後にみるが, それに劣らないくらいハンセンから学問的にも人格的にも強い影響を受けたようである。それは彼の最大の功績であるドイツ農民解放史の研究(“*Die Bauernbefreiung und der Ursprung der Landarbeiter in den älteren Theilen Preußens*”, Leipzig 1887) の着想や動機が, ベルリンでのハンセンとの交流から得られたと考えられるからである(注 34) 参照)。

統計ゼミナールを修了したクナップは, 67 年, エンゲルの推薦でライプツィヒ市統計局長に就任する。局の仕事のかたわら, 「人口統計記録にもとづく死亡率の算出」(“Ermittlung der Sterblichkeit aus den Aufzeichnungen der Bevölkerungsstatistik”) と題する論文で教授資格を取得し, 69 年, 兼任でライプツィヒ大学の員外教授(統計学)となった。そして 74 年には, 正教授としてシュトラースブルク大学に迎えられた。このあと長い間の望みをかなえて, 研究テーマを農業史に移すことになった。この大学では一時期, プレンターノやシュモラーも同僚であったが, クナップはこの地がフランスに割譲される 1918 年まで同大学で働いた。その間, 二度にわたって学長も務めている。クナップはキャリアの晩年になって, 再び研究テーマを貨幣理論にシフトさせた。その成果である『貨幣国定学説』(“*Staatliche Theorie des Geldes*”, München u. Leipzig, 1895) は, マックス・ヴェーバーを除いてドイツ人学者からは評価されなかったが, ケインズやビグーを継承する人々からは, 貨幣理論の制度学派的アプローチとして高く評価された (Arthur Schweitzer)。日本でも早期に着目され, 宮田喜代蔵の訳で 1922 年に岩波書店から出版された。またクナップは社会政策学会の設立時からの会員でもあった。

- 16) 潮木守一氏によれば, 19 世紀前半のドイツでは, 博士の学位を取得するのに論文提出は必ずしも一般的ではなかったようだ。口述試験のみで授与されることも多く, ことに法学博士の場合がいい加減だったという。潮木守一『ドイツの大学——文化史的考察』講談社学術文庫, 1992 年, 200 ページ以降。また, 教授資格についても, 19 世紀前半には, 大学側が実施する論述式の資格試験に合格することで, 比較的たやすく取得できたという。同書 106 ページ。資格取得について厳格になっていくのは, どうやら 50 年代ころからのことのように, それも大学ごとにまちまちだったようである。
- 17) そのなかには, G. Hanssen, Das statistische Bureau der preußischen Monarchie unter Hoffmann und Dieterici, in: *Archiv der politischen Oekonomie und polizeiwissenschaft*, N. F., Bd. 4, 1846 という論文もあった。
- 18) 以下, 諮問と答申の内容は次の文献による。Friedrich-Wilhelm Schaer, Die Mitwirkung der nationalökonomischen Disziplin bei der Neuorganisation des Preußischen Statistischen Büros im Jahre 1860, in:

Vierteljahrschrift für Sozial-und Wirtschaftsgeschichte, 56. Band, 1969.

- 19) *Ibid.*, S. 237.
- 20) *Ibid.*, S. 235.
- 21) *Ibid.*, S. 235.
- 22) ルーヨ・プレントナー著、石坂昭雄・加来祥男・太田和宏訳『わが生涯とドイツの社会改革—1844～1931—』ミネルヴァ書房、2007年、69ページ以降（第二章第4節「ベルリンで教授資格を取得」）
- 23) *Ibid.*, S. 238.
- 24) G. F. Knapp, *Hanssens Lebenserinnerungen*, Ders., *a. a. O.*, S. 345.
- 25) *Ibid.*, S. 346.
- 26) G. F. Knapp, Georg Hanssen, in: *Ibid.*, S. 329.
- 27) *Ibid.*, S. 346.
- 28) *Ibid.*, S. 346.
- 29) *Ibid.*, S. 347.
- 30) *Ibid.*, S. 347.
- 31) *Ibid.*, S. 331.
- 32) プレントナー前掲訳書、45ページ。
- 33) G. F. Knapp, *a. a. O.*, S. 334.
- 34) クナップはここでむろん、自分自身について語っている。すなわち、主著『農民解放』の序文でいうように、彼の認識の目的は、「農業が問題なのでなく、農業に従事する諸個人、農業制度、社会諸階級相互の関係、そして国家のこれら階級に対する立場が問題である」とした。これを藤瀬浩司氏は「従来の歴史上の諸君主、政治家の伝記的な研究、あるいは狭く法制史的研究ではなく、社会政策史研究の立場から出発して、広く農業史的、社会経済史的な分析を試みたのである」と注釈している。氏によれば、クナップの農民解放論の秀でた点は、第一に、解放の結果生成する農村労働者に着目し、これを社会政策の中心の問題としたこと。第二に、農村労働者の生成を地主経営の維持の問題と密接に関連させて捉えたこと、すなわち、解放に際して大領主経営を廃して、直轄地を農民保有地に分割して小規模経営を増大させたシュレスウィヒ・ホルシュタインとは異なり、「このことは、プロシヤでは、生起しなかった。大規模地主経営が存続した。それにより零細保有地が調整から排除され、のちに膨大な土地なしの労働者が生成した。」
こうしてクナップは、プロシヤ農民解放を、「基本的に絶対王政による農民保護政策の体系と領主側の特殊利害との対抗において捉え、後者による前者の圧倒のうちに解放の性格をみ、これを批判している」と、藤瀬氏は総括している。以上、藤瀬浩司『近代ドイツ農業の形成』御茶の水書房、1967年、173-178ページ。

〔付記〕エンゲルに関する前回の拙稿「ザクセン統計局時代のエンゲル(3)——軋轢と訣別——」（『北海学園大学経済論集』第61巻第1号、2013年）の叙述の一部について、京都大学名誉教授、渡辺尚氏より次のようなご指摘をいただいた。

11ページ中ほどに、「sowenig A als B (AよりはむしろB)」とあるが、この場合の als は、wie の慣用的誤用なのではないか、そうだとすると「AでもBでもない」とするのが正しいのではないかと。

検討の結果、渡辺氏のご指摘が正しいと判明した。そこで、10ページ26-27行目の文章を、「私の辞職の決心は、傷ついた自尊心から生まれたものでも、自己本位なうぬぼれの気持ちから生まれたものでもないということ、厳粛な気持ちで断言いたします。」と訂正し、11ページ14行目から27行目までの叙述を削除したい。辞表のこの部分について、およびそれに対するシュミットの解釈についてのコメントは、他日を期したい。

終わりに、読者諸氏へのお詫びと渡辺氏への感謝を申し述べたい。